

Once upon a time

For adult only

mechi

Contents

晴明、異教の妖しと邂逅せる話	3
千夜一夜物語	40

このたびは、当同人誌を
お手にとっていただき、誠にありがとうございました。
お手に取って読みたいと思っていただき、ありがとうございます。

この本は、2022年に発行した同人誌を受注頒布用に整えたものです。
お楽しみいただけましたら幸いです。

晴明、異教の妖しと邂逅せる話

士御門大路の安倍晴明の屋敷。

に上がりこむと向かい合つて座した。

夕刻。晴明が宮中から戻り、源博雅が現れたのはほぼ同時であつた。

博雅は、いつものように従者も連れずにひとり、徒步である。醍醐天皇の孫であり、従三位の上級貴族の身だが、そういったことには頓着のない漢であつた。

「おう、博雅が、よいところに来た」

晴明は門をくぐる前から「うつとうしい」と束帶（貴族の正装）の袍（表着）を脱ぎ始めると、博雅を細めた目で見やつた。

「おまえが昨日、呼んだのであろう」

「そうであつたな」

呆れて瓶子を掲げた博雅に、晴明はふわりと笑みを返した。

「呼び立てたのはただの気まぐれだつたが」「が？」

「なに、面白い話ができた」

ふたりは屋敷を周つて裏手に向かい、庭を望む濡れ縁

* * *

如月の庭は、青い。葉桜が散り、舞台を退いたそこは今、露草、桔梗、山吹、どくだみ、つつじ、藤などがみつしりと咲いている。中でも、池を縁取る菖蒲が連なる様は見事であつた。

博雅が庭から顔を戻すと、胡座の膝の先に置かれた盃に酒が満たされていた。例の如く、肴の支度や酌を行うのは蜜虫と蜜夜、晴明の識神である。

「して、面白い話とは」

「まあそう急くなよ」

晴明は涼しい笑みを深め、紅い唇に瑠璃の盃を寄せた。

「そうか」と博雅も盃を一口舐め、炭火で焼いた諸子に手を伸ばした。

「琵琶湖の諸子さ」

「逸品だな」